

記念祝典一般記事

東京高等商業学校創立四十周年記念祝典は、同校所定の記念日たる九月二十二日を以て該祝典の第一日と爲し、其れより順次日を逐ふて同月二十五日に至る四日間に涉りて挙行せられ、実に都下近來の盛況を極めたるが先づ其の式典の次第書を列挙すれば即ち左の如し。

創立四十年記念祝典次第

第一日（九月二十二日午前九時より）

一、校長式辞

一、教授、卒業生、学生各総代祝辞

一、來賓祝辞、演説

教授総代男爵

卒業生総代

学生総代

文部大臣法学博士

農商務大臣

男爵

東京商業會議所会頭

東京帝国大学総長理学博士

神戸高等商業学校校長

私立慶応義塾長

内閣総理大臣伯爵

職員出身者有志総代

一、三十年以上勤続者功勞頌表

神田乃武氏

成瀬隆藏氏

高瀬莊太郎氏

高田早苗閣下

河野広中閣下

波沢栄一閣下

中野武營閣下

山川健次郎閣下

水島鏡也閣下

鎌田栄吉閣下

大隈重信閣下

間島与喜氏

一、右総代ヘヤー氏答辞

一、昼食

一、提灯行列（午後六時より）

第二日（九月二十三日午前八時より）

一、記念講演

開会の辞

カント認識論と純理経済学

本校講師商学士

本邦に於ける保険の起源及其發展に就て

本校講師法学博士

米国新海員令と我國の海運業

本校教授商学士

工業政策の根本問題

戦争と貿易

法果競合論

簿記計算学に就て

閉会の辞

第三日（九月二十四日）

開校四十年記念祝賀一橋会第十四回大会順序

午前八時 開門

商品陳列所公開（八時—四時）

彩友会作品展覧会

出身先輩研究著書陳列

広重展覧会

左右田喜一郎君

村瀬春雄君

堀越善重郎君

堀越光三君

松村光三君

堀越善重郎君

堀越善重郎君

乾政彦君

本校教授下野直太郎君

（八時—四時）
於集会所楼上

英語部展覽会 (八時—四時)

庭球部仕合

柔道部仕合

剣道部仕合

弓術部仕合

大神楽

剣舞

茶番手品 (踏箱会寄附)

角力 (十一時—二時)

三越音楽隊 (専攻部寄附) 二時—五時
於雨天体操場

仮装行列 (午後一時より)

改良新楽隊

大蛇

アナクロニズム

弥次喜多旅行

江戸の面影

南洋土人の観校団

気変り男

模擬売店 (ビール、蕎麦、洋食、
汁粉、菓子、十二時より)

一橋バザー

午後四時 閉門

午後五時 清酒饗応 (於如水会敷地)

午後六時 余興 (夜の部開始於大講堂)

一、開会の辞

英国元老院議員アレキニツク、ヘヤレス氏

通訳

小杉敬安氏
柳川恩恵氏

平松駒雄

弁士 肥春暮

黒大座

変風会

むら

端艇部

凶南水

山口春

庭球部

英語部

貞山

弁士 桜溪

一 同

午後十時半 閉会

第四日 (九月二十五日)

午前八時より隅田川上流に於て端艇競漕会

以上

○該祝典の第一日 九月二十二日 (水曜) は、其の前々日まで、数日間降り続きたる雨も、今は全く名残りなく晴れわたりて、実に秋晴れの好天気なりしを以て、此の光栄ある長き歴史を有する同校の記念式典を祝さんとして、朝来朝野紳士の校門さして参集する者引きも切ら

ざりしが、今其の来賓各位の芳名を列举すれば先づ大隈首相、高田文相、河野農相、一木内相、渋沢男、中野東商会頭等を始め、左記三百四十七名に達し、若し之れに母校教職員、学生々徒等を加算するときは、式典参列者の総数、無慮一千七百有余名の多きを算するに至れり。即ち来賓の氏名を挙ぐれば

堀田正郁君	堀越善重郎君	星野準一君	滝沢吉三郎君	竹田常治君	田村実君	内閣総理大臣伯爵	大隈重信閣下	富谷銚太郎君	富永純吉君	東海浩太郎君
内務大臣法学博士	一木喜徳郎閣下	大村劭君	大倉文二君	大久保康雄君	相、河野農相、一木内相、渋沢男、中野東商会頭等を始め、左記三百四十七名に達し、若し之れに母校教職員、学生々徒等を加算するときは、式典参列者の総数、無慮一千七百有余名の多きを算するに至れり。即ち来賓の氏名を挙ぐれば	農商務大臣	河野広中閣下	外山恭三君	奥健蔵君	岡村猪之助君
文部大臣法学博士	高田早苗閣下	萩島太郎君	落合高次君	奥田操君	り。即ち来賓の氏名を挙ぐれば	男爵	岩出惣兵衛君	大野市太郎君	大隈信常君	小川誠君
泉屋清次郎君	岩崎寅作君	小田栞捨次郎君	大石省吾君	尾高次郎君	今村有隣君	今西与八郎君	伊藤多兵衛君	大谷登喜雄君	大隈信常君	大沢逸足君
磯江潤君	飯田巽君	渡辺寛五郎君	渡辺大輔君	渡辺桜陽君	伊藤利三郎君	伊藤豊重君	石橋甫君	小栗一雄君	大竹八郎君	渡辺雄男君
伊藤律太郎君	伊藤利三郎君	渡辺寛五郎君	渡辺大輔君	渡辺桜陽君	伊藤豊重君	伊藤豊重君	石橋甫君	大原春次郎君	大竹八郎君	渡辺雄男君
石橋新蔵君	石原中央君	渡辺寛五郎君	渡辺大輔君	渡辺桜陽君	伊藤豊重君	伊藤豊重君	石橋甫君	落合高次君	奥田操君	渡辺雄男君
市川芳雄君	犬塚信太郎君	川村瓊一君	汾陽泰造君	和桐荒城君	池田鎌三君	池田鎌三君	市川光太郎君	落合高次君	奥田操君	渡辺雄男君
伊藤万太郎君	石井健吾君	川井讓君	河添清磨君	加藤菜作君	長谷川鏡次君	橋本才吉君	橋本才吉君	大隈信常君	大竹八郎君	渡辺雄男君
原亮一郎君	橋口次平君	加藤孝君	河原英二君	垣内幸太郎君	橋本才吉君	橋本才吉君	橋本才吉君	大隈信常君	大竹八郎君	渡辺雄男君
原錦吾君	橋口次平君	加藤徳雄君	河原英二君	垣内幸太郎君	橋本才吉君	橋本才吉君	橋本才吉君	大隈信常君	大竹八郎君	渡辺雄男君
羽田福太郎君	林復一君	河井浩君	河原英二君	垣内幸太郎君	橋本才吉君	橋本才吉君	橋本才吉君	大隈信常君	大竹八郎君	渡辺雄男君
浜田四郎君	林復一君	加藤徳雄君	河原英二君	垣内幸太郎君	橋本才吉君	橋本才吉君	橋本才吉君	大隈信常君	大竹八郎君	渡辺雄男君
西谷英寿君	西村正立君	河井浩君	河原英二君	垣内幸太郎君	橋本才吉君	橋本才吉君	橋本才吉君	大隈信常君	大竹八郎君	渡辺雄男君
甫守謹吾君	堀田芳誉君	横倉房吉君	吉村繁君	川田常八君	西沢善三郎君	西端鎮次郎君	西端鎮次郎君	大隈信常君	大竹八郎君	渡辺雄男君
堀田正郁君	堀越善重郎君	星野準一君	滝沢吉三郎君	田村実君	西沢善三郎君	西端鎮次郎君	西端鎮次郎君	大隈信常君	大竹八郎君	渡辺雄男君

野原幸太郎君	野々村政也君	上野亀太郎君	植水国松君	卜部直輔君	武者鍊三君	中本正助君	中岡孫一郎君	中村米平君	七海兵吉君	中川鎌二郎君	中村学君	中丸一平君	土屋泰君	筒井継男君	土屋金治君	園田忠雄君	法学博士添田寿一君	竹内荘治君	田下文治君	田内徳次君	多田房之輔君	鷹木威勢吉君	高橋季吉君
黒川善一君	野間貞次郎君	内田佐平二君	宇井孝三君	牛窪弥市君	宇高寧君	村木正幹君	成瀬隆蔵君	中村伍七君	中田亮一郎君	名兒耶六都君	成瀬達君	内藤久寛君	根岸鍊次郎君	土屋豊吉君	辻音吉君	曾根伝君	相馬永胤君	玉木弥市君	田沼始君	多田羅直一君	田川大吉郎君	田島義方君	高橋与四郎君
久保一郎君	信永清三君	野田勢次郎君	牛島久次郎君	梅沢親汎君	上原種美君	村上直次郎君	中野武管君	中川操君	男爵中島久満吉閣下	成瀬仁蔵君	中島半次郎君	中山佐市君	長柄徳次郎君	筑紫今朝彦君	辻村英三君	塚口慶三郎君	染谷成章君	伊達宗康君	立花寛蔵君	田中虎之輔君	高野復一君	立花義順君	高柳国次郎君
相川良蔵君	浅野長七君	綾部定太郎君	法学博士天野為之君	手島精一君	後藤次男君	小島憲一郎君	府川久宗君	藤原勘太郎君	毛見信次君	工学博士真野文二君	松田精一君	松井啓助君	松崎万之丞君	町田豊千代君	松井定一郎君	山田万里四郎君	八十島親徳君	山崎隣太郎君	安田善三郎君	法学博士桑田熊蔵君	黒川喜太郎君	窪田誠一君	窪田藤信君
安藤兼三郎君	安達三郎君	荒川辰之助君	安藤博君	手束謙吾君	児島秀吉君	小室三吉君	藤村義苗君	藤瀬政次郎君	福田秀五郎君	間島与喜君	松本憲一君	松本幸一君	松尾初治君	丸岡久之助君	牧野元次郎君	松浦鎮次郎君	君本邦之助君	山本厚三君	八十島樹次郎君	山中友三君	窪田四郎君	倉橋一雄君	久世久君
安藤胖君	新井仁一郎君	相葉馨君	鎧谷一郎君	青木正太郎君	江藤甚三郎君	近藤正平君	小林禎次郎君	藤本徳治君	古田友直君	法学博士松波仁一郎君	増田兼松君	松尾弥太郎君	丸山良太郎君	松本武雄君	前川万治郎君	丸山環君	山本喬六君	安川喜一郎君	山口増蔵君	山崎繁次郎君	草間伊太郎君	黒川健二君	男爵久保田讓閣下

青木 信次郎 君	浅沼 徳之助 君	秋田 宗四郎 君
佐々木 慎郎 君	佐藤 三雄 君	佐竹 房夫 君
佐藤 適 君	佐々木 信夫 君	沢野 銀蔵 君
男 法学博士 阪谷芳郎閣下	坂田 重次郎 君	文学博士 沢柳政太郎君
斎藤 吉十郎 君	北村 弥一郎 君	清浦 保垣 君
木下 友三郎 君	木下 照太郎 君	木村 勝蔵 君
木島 義夫 君	貴島 休蔵 君	山布 試三郎 君
結城 林蔵 君	湯川 礼三 君	美沢 進 君
美川 六右衛門 君	宮川 敬三 君	南塚 正一 君
宮沢 茂乙 君	御酒本 徳松 君	溝口 暢太郎 君
三木 君平 君	宮下 鈺太郎 君	宮崎 豊治 君
清水 省吾 君	清水 平一郎 君	徐 基殷 君
下 啓助 君	日置 益 君	正田 貞一郎 君
進 虫久哲 君	繁山 理 君	篠塚 宗吉 君
東 爽五郎 君	白石 喜太郎 君	広瀬 清 君
日向 利兵衛 君	平野 桂之助 君	森 廉次郎 君
諸井 巴 君	英木 英雄 君	森 川勝次 君
森江 有三 君	諸井 恒平 君	森 三郎 君
関根 親光 君	関屋 竜吉 君	関口 文蔵 君
関口 八重吉 君	関口 証二 君	関屋 為三郎 君
杉山 義雄 君	杉山 重義 君	鈴木 弘 君
鈴木 勇 君	栖原 啓蔵 君	鈴木 熊太郎 君
杉山 登 君	菅 礼之助 君	

是れより以下は孰れも団体代表の出席者諸君にして次第不同なり。

報 知 社	独立通信社	東京経済雑誌社
東京勸業協会	朝 報 社	やまと新聞社
帝国通信社	愛国通信社	都 新 聞 社
時事評論社	ジャパンガゼット社	同 文 館
中外商業新報社	開 発 社	大日本織物協会
日 就 社		

定刻を報ずるや、校長法学博士佐野善作君登壇せられ、閣下並に諸君、是より本校創立四十周年記念式を挙行いたします。先づ第一に式辞を朗読いたします。

校長法学博士佐野善作君式辞

茲ニ本日ヲトシテ本校創立四十周年記念ノ祝典ヲ挙グルハ、本校関係者ノ均シク満足スル所ニシテ、不肖善作ノ最モ欣幸トスル所ナリ。惟フニ商業教育ノ隆興ハ国民経済ノ發展ト国際通商ノ振張トニ伴フ必然ノ現象ナリト雖モ、其制度経営ノ宜シキヲ得ルト否トハ、国運ノ進歩ニ至大ノ影響ヲ及ボスベキモノトス。輒近世界列強何レモ心ヲ商業教育ニ注ギ、争フテ之ガ施設ノ完備ヲ企画スルニ至リタルハ、決シテ偶然ニアラザルナリ。本邦ノ商業教育ハ明治八年故森有礼子ノ創設ニ係ル商法講習所ニ濫觴シ、爾来幾多ノ変遷ヲ経テ以テ今日ニ至リタルモノニシテ、右商法講習所ヲ直系ノ祖トシ、永ク本邦商業教育ノ中枢ヲ握リ、同種学校ノ宗家ト仰ガレ、常ニ最高ノ地位ヲ占メシモノヲ実ニ本校ト為ス。今ヤ各種ノ商業学校全国各地ニ起リ、其數百有余ヲ以テ算フルノ盛況ヲ呈スルニ至リタリト雖モ、一モ範ヲ本校ニ採ラザルモノナシ。而シテ本校ノ卒業生ハ、其數既ニ五千ニ垂ントシ、内外各

種ノ業務ノ枢機ニ与リ、殊ニ本邦商人ノ手ニ行ハル、外国貿易ノ実務ノ如キハ、殆ド本校出身者ノ執筆スル所ナリト云フモ敢テ過言ニアラザルナリ。本校ガ斯ル貢献ヲ為スヲ得ルニ到リタル所以ノモノハ、蓋シ維新以降皇國隆興ノ齎セシ結果ニシテ、時運ニ負フ所大ナルヤ勿論ナリト雖モ、亦其創立者ノ卓見ト擁護者ノ熱誠ト、過去ニ於ケル経営者及ビ教職員ノ努力トニ頼ラズンバアラザルナリ。若シ夫レ現今本邦ノ商業ハ欧米先進國ノ其レニ比シ未ダ大ニ遜色アルヲ免レス、之ニ従来スル者ノ奮励ヲ要スルヤ真ニ切ナルモノアリ。商業教育ノ現情モ亦間然スベキ点尠ナシトセズ。殊ニ本校ノ制度内容ニ至テハ百尺竿頭更ニ一步ヲ進ムルノ要ナキニアラズト雖モ、創立以來四十ノ星霜ヲ経タル今日ニ当リ恰モ光輝アル

今上天皇陛下登極ノ大典ニ遭逢シテ、本校教職員、卒業生、学生生徒等此一堂ニ集會シ聊カ記念ノ祝典ヲ挙げ、朝野貴紳ノ蒞臨ヲ仰ギ、本校創立者擁護者ノ徳ヲ頌シ、過去ニ於ケル経営者及ビ教職員ノ功ヲ表シ、又永年勤続ノ勞ヲ慰スルト同時ニ、共ニ奮テ斯道ノ為メ益々努力センコトヲ声明シ、本校将来ノ發展ヲ期スルハ、是レ本校関係者一同ノ本懐トスル所タルベキヲ疑ハザルナリ。善作偶此好機ニ際會シ職ヲ本校長ニ奉ズルハ、実ニ一生ノ榮譽ニシテ欣幸ニ勝ヘザル所ナリ。一言蕪辭ヲ抒ベテ以テ祝意ヲ表ス。

教授総代男爵神田乃武氏祝辞

閣下並に來賓諸君

今日創立四十年記念式を挙ぐるに方りまして、本校の為に力を御尽し下された所の方々に對して教職員を代表して一言感謝の意を表したい

と存じます。

東京高等商業学校が、四十年の歴史を経て、斯の如き盛運に達して、五千名の卒業生を出すに至りまして、今日此盛大なる記念式を行ふに就きましては、私は実に喜に堪へぬ次第で御座ります。私は二十年程此学校に働いて居りますが、二十年間の事を考へてみますと、色色想起することが御座ります。況て今日茲に御列席になつて御出になる渋沢男爵閣下の如き、四十年一日の如く此学校の為に御心配下されました所の方は、言葉につくされぬ愉快を御感じのこと、存じます。

扱よく聞くことで御座りますが、欧米人は維新以来の吾國の發達をみて、日本は五十年間に歐羅巴人が五百年間かゝつて進んだ丈のことをしたと申して居るさうで御座ります。してみますと此学校が四十年間になした所のものは、つまり、四百年の仕事に當る訳かと考へます。譬へて申しますれば今日の東京高等商業学校は四十年ではなく、四百年の大木で御座ります。それでそもそも、此大木の種は何時何人によつて蒔かれたかと考へて見ますと、明治三年に故森子爵が弁務使として米國に行かれた時代に萌芽を作つたので御座ります。其時に既に留学して居られて、ニューチャージャー州の、ニューアーク市に於けるビジネス、カレヂで商業学を研究して居られたのが、後に此学校に最縁故の深い恩人となられた所の富田鉄之助先生で御座りました。其当時の御話を承りますと富田先生は校長のウイリアム、ホキットネー氏の家に寄宿して居られましたので、森子爵はホキットネー氏と往来せられました、日本に商業学校を建てなければならぬと云ふ考を持たれ、遂にホキットネー氏が一家をあげて日本に來られることに

なつたのださうで御座ります。

それから明治八年になつて、森子爵は富田鉄之助君と共にホキットネー氏と協力して、商法講習所と云ふものを建てられました、之れが吾国に於ける商業教育の濫觴でありまして、吾高等商業学校の芽生時代で御座ります。福沢先生が此商法講習所のために基金を募るために書かれたものを見ますと、其当時の有様がうかゞはれ面白いと思ひます。中々長いもので御座りますが、其終りの一節文を読みます。日本の文明未だ進まずして何事も手後れとなりたる世の中なれば、独り商法の拙なるを咎むるの理なし、何事も俄かに上達すべきに非ず。唯怠らずして勉強すべきのみ。維新以来百事皆進歩改正を勉め文学を講ずる者あり、芸術を学ぶ者あり、兵制をも改革し工業をも興し、頗ぶる見るべきもの多しと雖、今日に至る迄全日本国中に一ヶ所の商学校なきは何ぞや、国の大闕典と云ふべし。

凡そ西洋各国商人あれば、必ず亦商学校あり、尚我武家の世に武士あれば必ず亦剣術の道場あるが如し、剣を以て剣術を学ばざれば戦場に向ふべからず。商売を以て戦ふの時代には商法を研究せざれば外国人に敵対すべからず。苟も商人として内外の別を知り、全国の商戦に眼を着くるものは勉むる所なかるべからず。米国の商法学士ホキットネー氏積年日本に來りて商法を教へんとする志あり。森有礼、富田鉄之助兩氏の知る人なり。東京其他の富商大賈、各其分を尽して資金を出すの志あらば、兩氏も亦周旋して其志を助け成すべし。

森、富田兩君の需めに応じて、

明治七年十一月一日

福沢諭吉記す

とあります。明治七年の頃には、教育事業に資金を募ると云ふこと

は中々容易のことではなかつたに相違御座りませぬ、殊に商業教育の爲めと云ふことは非常に困難のことであつたらうと存じます。創立者たる森子爵、富田鉄之助君の熱心誠に有難いもので御座ります。此商法講習所は築地の森子爵の邸内に在りましたが、明治八年の暮に森子爵が全権公使として清国に赴任せらるゝに就て之れを東京会議所に寄附されました。それで森子爵に直接に御恩に預りましたのは誠に短い間では御座りましたが、其後矢野先生が校長をして居られた時代にも色々学校のために御心配下されたさうで御座ります。又富田鉄之助君は其後引続き商議委員として学校の為に御心配下されました。私は茲に是等の最初の恩人に対して最深き感謝の意を表したいと存じます。

かう云ふ次第で商法講習所は東京会議所の手にうつされたので、渋沢男爵、益田孝君、福地源一郎君、木村利右衛門君、清水九兵衛君が初めて規則を御定め下されました(ママ)此学校の組織が整頓致したので御座ります。

扱、斯様にして種は時かれ、芽生時代に這入りましたが、之れを育てられた方が無くてはなりません。四十年の成長の間に此学校は三度所轄が変わりまして、其間に直接間接手をかけて下された方々は、勿論少くはないので御座りますが、其内でも茲に第一にあげなければならぬのは、今日も茲に御列席になつて御出になる、渋沢男爵閣下及び、創立以来長年の間校長として献身的に力を尽された所の故矢野次郎先生で御座ります。矢野先生の偉大なる功績につきましては成瀬君の御話に譲ります。渋沢男爵が商法講習所設立以来今日に至る間四十年一日の如く恰も慈母の子を思ふが如き心を以て吾高等商業学校を御育

て下されたことに對しましては、私は洵に感謝の言葉が御座りませぬ。此四十年の成長をなす間に此等は幾度か暴風雨に遭つたにも係らず、幸にして倒れることもなく又は大樹の蔭に倚つて成長すると云ふこともなく、立派に独立の大木となつて今日四百年の大木の誇を感じることが出来ますに就ては、私は茲に洪沢男爵に對して最深き感謝の意を表する次第で御座ります。

改めて私が茲に申上る迄もなく、此四十年間に此学校の為に御心配下されました方々は勿論甚だ多いので御座りまして、大倉喜八郎君、益田孝君、福地源一郎君、洪沢喜作君、米倉一平君、松尾儀助君、森村市太郎、現市左衛門君、平野富二君、原六郎君、林徳左衛門君は商法講習所の基本金募集の為に御尽力下された方々で御座りまして商法講習所が東京府の管轄に屬して居りました時代に一時廃止の悲運に遭ひましたにも係らず、直に復興維持せらるゝ様になりましたのは此基本金の御蔭と申さねばならぬと存じます。其当時の東京府知事故楠本正隆君、故松田道之助君、故沼間守一君などの御尽力下されました。此外四十年間に起りましたことは勿論多いので御座りまして、其都度御尽力に預りましたことに就きましては一々茲に御礼を申上ることは出来ませぬが、最近には先年専攻部が廃止せられましたに就て、生徒は深く之れを憂ひました。遂には一時は勉強も手につかぬと云ふ有様、私共も心配致しましたが、洪沢男爵、中野武宮君は商議委員として、島田三郎君は学生父兄証人総代として御心配下されました結果、目出度落着致しましたのは誠に感謝に堪へぬ次第で御座ります。

最後に私は高等商業学校の歴史に於て誰も忘れることの出来ないもの

をあげたいと存じます。即ち商議委員として御助力下された所の方で御座ります。是等の方々は最初の商法講習所の委員を合せて今日迄に三十三名で御座ります。最初に商議委員として任名せられたのが洪沢男爵、富田鉄之助君、益田孝君で御座りまして、それから最長い間御尽力下されました方々は洪沢男爵、益田孝君、園田孝吉君、近藤男爵、和田垣博士、莊田平五郎君、阿部泰蔵君などで御座ります。高等商業学校が四十年の独立の成長をなし、今日の盛大に至ることが出来、国家の為に御奉公をすることが出来るのは、偏に是等諸君の懇切なる御助力の御蔭であると云ふことは、私が茲に申上る迄もないことで御座りまして、私は茲に此席に於きまして殊に諸君に對して最熱心なる感謝の意を表さなければならぬと思ふので御座ります。

繰返して申しますが、吾高等商業学校は斯の如く多くの熱心なる援護者を授けられて居ることを深く感謝しなければならぬ。是等諸君の御同情に對しても私共教職にある者は益々奮励しなければならぬと思ひます。生徒諸君も永く御恩を忘れず益々此名譽ある高等商業学校の歴史の光を増す様に努めなければなりません。茲に謹で感謝の意を表する次第で御座ります。

卒業生總代成瀬隆蔵氏祝辭

閣下、諸君、茲に本校卒業生を代表して一言の祝辭を述べることを得るは、私の頗る光榮と存する所であります。此祝辭は今神田男爵教授が述べられました如く、私も前に力を尽されました所の諸君に對して一々感謝の意を表する積でございましたが、幸ひにも同君が細かに述

べられましたから、私は之を省略いたします。

校長が述べられました如く、今日は日本に於ても商業教育が大分発達を致して参り、又欧米諸国に於ても今や大抵の大学には商業科を大学の一科として設け、種々の程度の商業学校も出来ましやうな次第でございますが、四十年前即ち明治八年の頃欧羅巴亜米利加の商業教育の狀態は何う云ふ模様であつたかと云ふ事を述べますと、仏国巴里の最高等商業学校、高等商業学校、商業学校、里昂に高等商業学校がございました。それから白耳義のアントワープの高等商業学校、是には茲に御臨席の村瀬君なども彼処の出身で在られます。其他日本人が行つて学んだ所の学校であります、独逸のライプジック、伊太利のゼノア、壞地利のヴェキアナ、等に高等商業がございました。欧羅巴で主なるものは夫等で、亜米利加では御承知もあるブライアント、ストラトン、バツカルトなどビジネス、カレーヂを興しました。其ビジネス、カレーヂは当時六十余校あつたと思ひます。貿易の最も進んで居ります所の英国では其当時商業学校らしき学校が一枚もございませんでした。是は英国は種々の方法を以て貿易商業を奨励いたしました。一例を挙げますればキング、アセルスタンの時代に自分の商売で三度以上英国海峡を渡つた者へは、ザーンといふ今で申しましたならばサーに近い尊称を与へて奨励し、其他種々の方法を用ゐまして奨励したのと、英国人の気性、土地の關係其他から非常に商売の発達を來たし、英国の商店は恰も商業学校の如きものであります。故に商業教育は起りませんでした。然るに其後偶々英国商工業衰頹の原因を取調べる為に目指す所の各地に人を派しました時に、其原因の一つとして独逸では商業教育を努め、之に外国語学を授けて、当時既に倫敦に三万以

上も手代等に這入り込んで居つて、段々商売の道を覚え、富を得、進んで自分の商売を取るに至りましたことを発見して、オクスフォード、ケンブリッジの両大学に謀つて商業教育の学科課程の凡例を拵へ配布する等、商業會議所に於て大に商業教育の勃興を努めました。其努めましたのは明治二十一、二年の頃と思ひます。其頃漸く努むるに至りましたけれ共、前述べし如く明治八年頃には欧羅巴中此学校の在つた処は少数で、英吉利に至つては無いといふやうな有様でございました。斯様な有様であるに日本では先覚者が商業学校を興したのでありますから、是は国民即ち東京府民の要求から起つたので無い、^(ママ) 或は要求から起つたにしました処で、当時の国力に至つて微々たるもので、国庫の歳入歳出も僅かに六千九百万円位の処であり、貿易の高は輸出併せて五千万円位のもので、至つて小さな身代でございますから、国民の要求に出でしも微々たる経費に過ぎませぬでございます。まして少数の先覚者のみが必要と認めて、国民は不用なりと思つて居りました処に商法講習所が設置されたこと故、経費は充分に供給される訳にいかず、年々歳々面倒が起つたのであります。さう云ふ面倒な中を先刻も懇々神田教授が述べられた如く、渋沢男爵等の方々が非常な骨折りで之を維持し來つたのであります。其当時の校長矢野次郎君の事は神田男爵が成瀬に譲るといふ御言葉がありました。僅かな時間に彼是述べるまでも無く皆様が其功績は能く御承知で入つしやると存じますから敢て陳述いたしません。爾來監督の位置に在らせられたる当局者、商議員、校長等今日に至るまでの諸君が非常に尽され、又教授の側としては北米合衆国ニューアークの商業学校の校主であり校長でありました、ダブリュー、シー、ホイットネーといふ人、

此人が懇切に教授を致された。随分彼是の議論はございましたけれども、技倆はナカ／＼有る人で、それと同時に高木貞作君が暫時でございましたけれども、大にホイットネー氏を助けられました。是等の人に第一に感謝し、併せて爾來の教職員の側で段々尽された人が多うございますが、間接直接に尽力の方々の御氏名を挙げて一々謝意を表はすといふことは此少時間で無論出来ませぬから、商法講習所から今日に至る迄学校の為に尽された方々の総てに対し卒業生として厚く感謝の意を表します。併せて前申述べました如く、最初の至つて経費の少い微々たる学校が今日の如く、発達したのみならず、段々模範を此校に取つて、東京のみならず各地にも沢山斯う云ふ子や孫学校が繁昌して行くといふことに至りましたのは、我々の大に喜如斯繁昌して参つた処から推して見ますと、今後十年即ち創立五十年の祝典を挙ぐる場合に至つたらば更に大なる進歩を現はしましょう。殊に御承知の通りの時局でありますから、世界に大なる変化を起し、又日本に大に幸することでございます。此時機に於て現在御從事の方々が充分に御努力下さいましたならば、今日までの発達より更に大なる発展のあることを疑ひませぬ。又それを只管祈ります。

学生総代高瀬莊太郎氏祝辞

夫レ天地ハ人ヲ益スト聞ク。誠ヤ生等今明ニ其事実ニ面ス、時恰モ御大典ヲ行ハセラルル年ニ方リ、我創立四十年ノ祝典ニ列シ得ントハ、アア是レ實ニ薰育寧日ナキ諸先生ト、誘導至ラザルナキ諸先輩ト相結ビテ齋ラサレタル賜ナラズンバアラズ。

一橋四十年ノ歴史ヲ回顧セバ、人去リ人來リ或ハ冷或ハ熱又時運ノ變遷ニ伴フ曲折モ少ラズ。況ヤ年少氣銳時ニ迷路ニ入ラザルナキニ於テヤ。此間ニ処シテ其眼ヲ開キ其針路ヲ示シ、以テ校運ノ隆昌ニ伴ハシメタルノ勞ハ誠ニ偉大ナリトス。生等今日ノ盛典ヲ拜シ特ニ諸先生ト同窓會員諸彦トニ対スル感謝ノ情切ナルモノアリ。

今ヤ時運甚急ニ南海ノ浪亦荒クシテ、本校ノ使命ヲ果スベキ機ヤ迫レリ。一橋々畔秋氣清ク公孫樹上暁星高シ。本校ノ前途亦澎湃タルカナ。思フテ茲ニ至レバ生等軼歎喜ノ情ニ堪ヘザルナリ。仍テ一言今日ノ盛典ヲ祝スルト共ニ感謝ノ意ヲ陳ブルコト爾リ。

文部大臣法学博士高田早苗閣下祝辞

本校創立以來校運年ト与ニ進ミテ有為ノ卒業者ヲ出スコト將ニ五千ニ垂ントシ、我實業界ニ貢獻スル所洵ニ多大ナルモノアリ。今ヤ開校四十年爰ニ記念ノ式典ヲ挙グ。本大臣ハ本校今日ノ隆昌ヲ喜ブト共ニ、其ノ之ヲ致セルモノ實ニ當時者諸君ノ熱誠其ノ職ニ尽シ、経営其ノ宜シキヲ得タルノ結果ニ外ナラザルヲ思ヒ深ク諸君ノ勞ヲ多トス。

惟フニ貨ヲ通ジ財ヲ殖シ以テ国力ノ充実ニ資シ、以テ人生福利ノ増進ヲ図ルハ商業ノ真意義ニシテ、而モ之ガ徹底ハ必ズヤ素養アリ人格アル人士ノ努力ニ竣タザルベカラズ。殊ニ今次ノ時局ハ至大ノ影響ヲ我ニ迫ボシ、實業振興ノ必要ヲ感ゼシムルコト洵ニ痛切ナルモノアリ。事ニ商業教育ニ從フノ士ハ宜シク時運ノ要求ニ鑑ミ、奮勵努力益益學術ノ研鑽ニ勩ムルト共ニ、常ニ斯業発達ノ趨勢ニ留意シ、學理ト實際ト兼ネ綜セテ十分素養アル有為ノ人材ヲ養成シテ、其ノ目的ヲ貫徹スルニ遺憾ナカラント期セザルベカラズ。冀クバ本校當事者諸

君之ヲ既往ノ実験ニ徴シ、之ヲ将来ノ趨勢ニ稽ヘ學術ノ講究ニ、生徒ノ教養ニ、自今一層其ノ力ヲ効シ以テ益々我商業界ノ發達ニ資セラレ
ンコトヲ。

一言以テ祝辞トス。

農商務大臣河野広中閣下祝辞

本日此祝典ニ際シ聊カ祝意ヲ表スルヲ得ルハ深く欣幸トスル所ナリ。
抑モ本校ハ創立以來星霜ヲ經ルコト茲ニ四十年、其間職員諸君ハ倦マズ怠ラズ克ク品位學識アル子弟ノ養成ニ勉メ、卒業生ヲ出スコト已ニ五千人而シテ是等卒業生ハ今ヤ我国実業界ノ中堅ト為リ、國運ノ發展ニ貢獻セルモノ頗ル大ナリ。邦家ノ為メニ慶賀セザルヲ得ンヤ。
然リト雖現今ノ大勢ハ商工業ノ振興ヲ促スコト愈々急ナリ。冀クバ職員諸君ハ更ニ益々薰陶ニ励ミ學生諸子ハ更ニ益々學業ニ勉メ、他日先進ノ士ト提撕呼応シ以テ大ニ國運ノ隆昌ニ資スル所アランコトヲ。

男爵渋沢栄一閣下演説

校長、臨場の諸閣下、諸君、學生諸子、此最も喜ぶ可き祝典に参上いたしましたのは私は満身の愉快を感じます。平和を貴ぶ商業学校の四十年の祝典に天も平和を示すの意でありますか、頃日來の雨が此の如き好天気となつたのは御互に最も喜ぶべき所であります(拍手)。跡が大分闊へて居る様子であるから余り長口上は却て御妨げになります。併し私は祝辞を朗誦する用意をして参りませぬ、又文章が拙いから左様な名文は書けぬ、故に諸君は御迷惑でも一言を述べて少々愚痴と喜悅とを申上げるのであります。

四十年の昔は若年の人から考へると大變に古く思ふでせうけれ共、私から見ると誠に昨日今日のやうなことで(笑)、人の上にも歲月の長短に大層な差があります。申上げるのも恐入りますが、大隈伯爵は私より尚年長者で入つしやる、而して将来もより以上に長い事と思ふのであります(拍手)。本校の起源は只今神田男爵が米國からホイットネー氏が來られてからの詳しい御話がありました。又これに付て森子爵が尽瘁された事も御申述になりました。唯子爵が支那へ行かれるに當りて本校を寄附されたといふのは少々事実が相違して居ります。是は私が其頃東京府の共有金取締をして居つたので森子爵と御相談の上、東京府に引受けたのである。或は寄附の心を以てなすつたのであらうが、單に寄附では無く協議上其学校を東京府が継続したのであります。是等の事は今日別に説明を要しませぬ。當時此商業教育が必要だと感じて東京府の知事大久保一翁に書を寄せ、大久保知事は其時分に共有金なるものがあつて、相當の補助を致して茲に初て商法講習所が出来たのである。其後森君が支那へ行かれるに付て其跡を東京府へ引受けたのであります。當時の商業教育といふものは斯く申すと御列席の大政治家に苦情を申上げるやうであるが、其頃の世の中は商業教育に余り眼を留めて居られなかつた。現に明治十四年東京府会が、斯かるものは東京に必要が無いから止めるといふ議決で、此学校をして一個人に移して了はうとしたが、誰もこれを怪まなかつた。私は憤然と之を怒つた(拍手)。凡、教育といふものは人を治めるばかりでは無からう。世の中に教員と學者とのみ在于て、國家が真に隆盛になりますか。國運が真に發達されますか。果して然らば政治をする人も無くてはならぬ、軍務に従事する人も無くてはならぬが、國の富力を進め

る人も亦無くてはならぬ。其富を致すにも教育の要るといふ事は言はずして明かである。何故世の中に政治にのみ教育が要つて、実業の教育が要らぬといふであらうか。何故に又政治にのみ名譽があつて実業には名譽が無いと思ふであらうかと私は憤慨したのであります。此事に關して四十年来前後通じて尽力したといふ神田男爵の賛辞を得まして、微力決して其賛辞に当ることは出来ませぬけれども、今申し上げますた觀念は、幸ひに継続し来りまして、明治十四、五年頃本校が東京府から捨てられて殆ど道路に彷徨するの場合に、私は種々の尽力を致し、政府に於ても大に見る所あつて一時農商務省に継続され、引續いて森君が文部大臣となられた時に高等商業学校となつて、所謂教育範圍の一部となつたのでございます。故に其頃の商業教育に対する社会の觀念には、殆ど寺子屋的で余り重きを置かれぬ有様であつた。昔時此校堂が出来ぬ前、向ふの外国語学校で卒業証書授与式がありました。而も其時卒業した一人に尾高次郎と申して現に此面前に居りますが、私は憤慨に堪へぬで、一体名譽といふものは唯に政治家や軍人のみに限つてあるものでございますか、私は実業にも必ず有るものと思つて居りますが、社会は如何に思ふでございませうか。どうぞ諸君仮令今は捨てられて居つても将来は御覧なさい。必ず天命の婦す所がある、撓まず屈せず此実業に精力を尽して下さい。当時の学生諸君に忠告したので今も能く記憶して居ります。其時卒業の一人が恰も此席に居りますから、立派な証人として宜からうと思ひます(拍手)。実に今日から顧みますると森子爵、大久保一翁、其後校長を長く勤めた矢野次郎君などは嘸地下で御喜でございませう。私は地上で喜んで居ります(拍手)。

長い事は申しませぬが、実業も今日は此の如く名譽を荷ふた、御互に

名譽ある商業家であるが、学生諸君に一言申上げて置きたいのは、総じて社会の事は憂も憂のみに終らぬ、喜も亦喜だけでは済まぬといふ事を覚悟して頂きたい(拍手)。憂には必ず喜の生ずるものあり、又喜には其中に憂が附随する、歡樂極まつて哀情多し、少壯幾時ぞ老を如何、世の中には始終さう云ふ変化がある、名を成すは毎に窮落の日に在り、事を敗るは多く因す得意の時で、喜には憂が胚胎するものである、而して其憂は何であるか。私は今日の社会の道德心の欠陥であると思ひます(拍手)。若し此道德心の欠陥が段々に増長して行つて、只自個の利益にのみ走るやうになつたならば、実業程忌む可きものは無いと反対に私自身も言ふかも知れませぬが、悲しい哉、昔の道德教育は極く程度の低いもので、孝行と云へば郭巨が釜を掘出すとか、王祥が鯉を捕つたとかいふ位の事である。又忠義は曾我物語、忠臣蔵で、君家に殉ずるで無ければ忠で無いといふやうに誤解されて、頗る範圍が狭いものであります。然るに此際西洋の知識丈け採り来つたから、其忠孝も皆破壊して、古いものは潰して空虚になつて居る処へ知識のみを入れたから、節義とか質実とか云ふものは度外視されて、殆ど地を掃つたと言はなければならぬ。商業道德の欠陥も亦是から生じて来る。但し社会には色々の変態があるから、唯単にそればかりを以て論断するのは或は禍する恐もありません。富といふものは仁義道德に依らなければならぬといふ事だけは深く御心得が無いと、誉も謗と変じ喜も亦憂を来すといふ事を覚悟せねばならぬと思ひます。茲に本校四十年の祝典に際して不祥の言葉らしく聞えて此席を汚すやうな虞もあります。くれ共、平素思ふて居りますことを、多数の学生諸君は将来実業界に

入つて其点を御注意になると思ひますから申述べて置きます。要するに往昔商法講習所の時代に私が憤怒した事は、今日の学生諸君は知らぬが、当時の人は聞いて下すつたであらうと思ふ。今日も亦商業の道德の欠陥は遂に社会の有害になるといふ事を予言して、一般の注意を企望する次第であります(拍手)。

東京商業会議所会頭中野武宮閣下祝辞

鎖国ノ夢未ダ覚メズ商ヲ以テ四民ノ最下級ニ列シ、世ヲ拵ゲテ牙籌ヲ取ルヲ錙銖ノ業トシテ賤ミタル往時ニ在リテハ、固ヨリ商業必須ノ課程ヲ選ビ専門ノ教育ヲ施クガ如キ思想絶テ邦人ノ脳裏ニ存セザリシ所ナリ。明治維新ノ後海外通商ノ途開クルニ及ビテ初メテ商業ノ尊重スベキヲ知り、之ヲ以テ富国ノ重要業務ナリト信ズルト等シク、之ガ専門教育ノ必要ヲ悟ルニ至リタルハ、抑モ文明ノ進歩ニ因ル必然ノ趨勢ナリト云フベシ。東京高等商業学校ハ我国商業教育率先ノ教壇ニシテ、実ニ其ノ権輿タリ。爾来四十年着々穩健ノ発達ヲ遂ゲ彬々輩出セル幾千ノ俊才ハ職ヲ朝野ニ奉ジテ我經濟及実業ニ貢献ス。此間国運ノ發展実業ノ殷盛、前後殆ド隔世ノ感アラシム。蓋シ之ガ功ヲ勒セバ本校ヲ以テ其随一ニ列セザルベカラズ。本日本校創業四十年式典ニ当リ敢テ一言ヲ賛ジ本校ノ為メニ祝福ス。

東京帝国大学総長理学博士山川健次郎閣下祝辞

東京高等商業学校校茲ニ開校四十年記念祝典ヲ挙ゲラル洵ニ慶賀ニ勝ヘザルナリ。願フニ本校ハ其源ヲ明治八年商法講習所ノ私設セラレシニ発シ、爾来

数次ノ変革ヲ経テ今日ノ進域ニ達セルモノナリ。抑々各種ノ実業中商業ハ其關係全世界ニ涉リテ広く国富ノ消長ハ之ニ繫リテ重シ。是ヲ以テ其發展ハ濟々タル良材ニ待タザルベカラズ。良材ノ教養ハ良校ニ待タザルベカラズ。本校夙ニ此旨ヲ体シ致々トシテ其育成ニ力ム。国家ノ為メ能ク尽セリト謂フベシ。然リト雖モ世界ノ進運ハ今後益々本校ヲシテ其本能ヲ發揮セシメテ已マザルベシ。本校愈々拡充整備ヲ期シテ隆昌今日ニ倍徙セル百年記念式ヲ挙ゲラレンコトヲ祈ル。謹テ祝ス。

神戸高等商業学校長水島鏡也閣下祝辞

本日本日ヲ以テ東京高等商業学校創立四十周年記念式ヲ举行セラル。公私共ニ關係有スルコトノ深キ予ノ如キ豈多少ノ感ナキヲ得ンヤ。願フニ本校ノ創立以降多数ノ人材ヲ養成シ本邦商業貿易ノ振興ニ貢献セシコト大ナルハ言ヲ俟タズ。加フルニ全国ニ商業教育ノ普及ヲ図リ、又商業ニ関スル各種學術ノ向上ヲ企テ、以テ今日ノ如キ斯学ノ盛運ヲ示スニ至リシ功績ハ特ニ之ヲ称揚セザル可カラズ。且四十年ノ歴史ハ学校トシテ之ヲ見レバ決シテ長期ナリト言フベカラズト雖モ、商業ノ輕視セラレシ明治ノ初期ニ萌芽ヲ發シテ幾多風雲ノ辛酸ニ耐ヘ、以テ今日ノ盛運ニ到達シタルヲ思ヘバ四十年ノ今時ハ記念ノ好機ニ非ズト言フ可カラズ。今ヤ本校ハ商業教育ノ枢軸タル地位ヲ占メ、又商業学校振興ノ源泉ト為リ、其ノ地位愈々鞏固ニ其ノ前途更ニ洋々タルモノアリ。是レ予ガ本日ノ記念式ニ際シ、特ニ祝賀ヲ禁ズル能ハザル所以ナリトス。依テ所感ヲ録シ以テ祝辞トス。

私立慶応義塾長鎌田栄吉閣下祝辞

私は私立慶応義塾長鎌田栄吉であります。本日本校四十年祭を挙行せらるゝに方つて、私にも一場の話を致すやうにといふ事でありませう。併し私如き者よりも多くの先輩諸君の在る事でありませうから、私は寧ろ控へる方が当然であると考へました。ところが官立学校を代表して山川総長の御演説があるから、私立学校を代表して私に一場の話をせよと斯う云ふ御依頼でありましたから、私は敢て辞退せずして茲に一言する次第であります。成程此高等商業学校の経歴も前半は私立、後半は官立である、即ち此学校は官私両様の性質をその歴史の上に包含して居る。明治八年に本校の前身たる商法講習所の設立のありました事は私も記憶いたして居ります。今の学生諸君には此商法といふ事が余程違つた意味に解せられて居るであらませう。けれ共当時は商業の事を商法と申しました。之に付て面白い話があります。私が学校を卒業して郷里へ帰つた処が、或旧知の士族が参りまして、私は年を取つて学問も出来ないから田舎に引込んで民法をやりますと、斯う云ふ(笑)。民法とはどう云ふ事だといふと、是は農業の事だといふ。成程商業が商法ならば農業は民法といふものでありませう(笑)。至極尤もだと思ひましたが、今日では商法民法共に全く違つた意味に用ゐられることになつた。之を以ても本校の履歴の決して新しく無いといふ事が分るのであります。そこで此四十年といふものを記念として祝典を挙げられる事は誠に目出度いことで、此四十年と云ふ長い間に段々此学校が発展して来たので、決して世間に在る官公立学校の多数の如くに政府の法令を以て一夜作りに作つた学校では無い。全く森有礼君其他の有志者の経営に成つた所の純私立から、一変して官立となり段

段と成長し発展して来たので、是は作つたので無くつて生れたのである、拡張したので無くつて生長したのである、誠に尊い歴史を持つて居る学校である、尤も其間にも随分此学校には時々多少の波瀾はありました。それで人多くは難治の学校であると称して居る(笑)。併しながら余り意気なく余り温順しいよりはピリツとした処も入用である(拍手)。即ち此学校の経歴は全く自己の力を以て発達して来たといふ此精神が潜伏して居つて、それが時々潑刺として動き初めるであらう、併しそれも或程度を越へるといふと相当に厄介な事になる、随分手を焼いて居つたのである。併ながら是が又其内に常識があつて学校を叩き潰すまでやるかといふとさうで無く、充分やつた処でまたピタツと静まつて了つて温順しくなる、といふのは此学校は自分達の学校である、只の政府の学校では無い。自分の学校の体面を汚し学校の基礎を危くする迄には決して騒がないぞと、チャンと自覚を持つて居るのである。見やうに依ては此辺が面白い処であります。併しどうも度々騒いで下さる事は私甚だ感心いたさぬのであります。此上の御騒ぎはどうか御免を蒙りたい。今波沢男爵の御話の如くに元来日本では此商業を軽蔑するといふ事は先輩諸君の嘆息せられた処で否、其先輩中多くの先輩は矢張商業を軽蔑して居つた。併ながら極く僅かなる達見家は夙に商業を奨励せしめ国の基礎を立てなければならぬ。それには商業の学問を奨励し商業学校を設立し、商業家に名誉の附くやうにしなければならぬといふ事に付て非常な苦心をせられた事は、唯今波沢男爵の御話の通りである。例へば福沢先生が明治の初年に従来士農工商といふのが普通の云ひ習はしであつたのを態と商工農士と改めやうとした。それが為に暗殺の厄運に罹らんとする迄に世間の非難攻

撃を受けたのでありますが、此の如くして商業に名譽を附けんことを努めて商業輕蔑の陋習を除いて国富を計つたものである。又森子爵の如き渋沢男爵の如き又矢野先生の如きは、最も此点から本校の發展に努められたものであらうと考へる。而して今日の商業学校の形体に付て云へば、是は政府の保護とか国庫の金の力でありませう、けれ共其精神は全く先輩諸君が此学校を育て、学校を擁護したのと、又本校出身の諸君が此学校を以て我母校であるといふ觀念の強いのが此高等商業学校の基礎を堅くしたものであります。例へば今仮りに議會に於て一切の学校費を否決したとマア斯う云ふ事があつたと仮定した時に、官立学校中で一番困らないのはどの学校であるかといふと、私は確かに此東京高等商業学校だと答へる。高等商業学校出身者が本氣になれば、一錢の官金を支給せられずとも、翌日から立派に獨立して此学校を経営し發展せしむる事が出来るのであります。そこで此四十年祭、四十年は少々……いや、四十にして惑はずといふ不惑の年に達せられたのでありますから(拍手)、若い時のやうに徒ら騒ぎ杯をせず、又余計の道草を食はないやうにして、益々實際の商業に貢獻せられる事に、学生諸君の御勉強は勿論の事先輩諸君も之を御世話なすつて發展せられることを希望する。そこで四十年の次は偶数で六十年祭を行はれない。俗に六十の本卦返りといふ事もござりまするから、どうか今度の六十といふ御祭の時には、元との私立学校の本卦へ返るが宜い。私立とか官立とかも其區別は強めて問はない。要するに獨立することに致したい。獨立学校となりて獨立の學問をなし確乎不動の状態に達せられんことを今からして希望する次第であります。一言此席に於て祝辞を述べます(拍手)。

内閣総理大臣伯爵大隈重信閣下演説

今日は此記念とす可き式典に臨んで一言の祝詞を述べるとを榮と致します。先刻から種々の祝詞演説を承はりまして頗る今昔の感に堪へぬのである。極く約めて私し今昔の感情を露骨に平易に述べれば、全く今日の商業教育も商業の發達も国運の發達も基する所は封建の廢滅、階級制の破壊、是が産業の自由といふ事を生み出したのである。産業の自由といふことは競争である、此機運に乗じて先見の明ある森子爵、及富田鉄之助、其他渋沢男爵等が産業の自由、茲に競争といふものが有る、時勢が何としても商業教育の必要といふことを言ひ出したのは、私は先見の明を多とするのであります。此の如き人に依つて茲に学校が成立つたのである。其時は動亂の時期を去ること僅かに五、六年未だ封建の勢ひ頗る熾んなことで、其時代に於きまして、渋沢男爵は慨嘆せられた。商業に道徳なし、商法の輕蔑されたといふ如き事を慨嘆されたが、今日は最早さう云ふ時代は経過して居ると思ふ(拍手)。福沢先生が士農工商は間違つて居る、商工農士と斯う言はれた、是は何だか少し極端な議論であるが、其時代の誤れる精神を警醒するに最も適當な言葉であると思ふ。全体凡、物は必要から起る、何から起るかといふと、政治根本が行かなければならぬ、政治的大改革をなさうといふ、是に於て政治が一番先に必要になつて来る。国家の存立の為には力が必要であるから、軍学兵学が起つた。処が此の如く戦はんとしても何等兵器も無い、何等物を拵えんとしても製造する機械が無い、是に於て物を作る必要が一番先きに起つたのである。渋沢君の商ふ商で無くして工が先きに起つた、工部大学が起つた。それだからマア我輩の思想では人間となつて土地の上に生活して居る時から、生産と

いふことは人間に起つた。其時は渋沢君の言ふ産業の自由、而して國際の關係、世界的の商業といふものは忘れて居つた。処が思想界に偉大な貢獻をなして渋沢君に依つて商を第一に数へられたのである。森君其他先見の明ある人は商を説いたのである。丁度彼商といふことの基は如何なるものであつたかといふと、国内の商、甚だしきに至つては一地方の商売、其時に渋沢君あたりは非常に心配して、銀行に力を尽されたけれど共が、此学校の生るゝ時代には僅か大阪と東京位のもので或は為替は出来たかも知れぬ。未だ其時代には現金通送の時代である。其時代の予算を御覽なさると現金通送費といふものがある。馬に金を着けてそれに属官が附いて馬方が曳いて東海道、仲仙道方々の地方に分配した。さう云ふ時代に商業も何業も要つたもので無い。其時は現物を納める、又現物交換の時代である、まだ動亂の時代を去ること遠からず、割合に人文の發達も遅いが是は商業が一番後に起つた所以で、世間に先見の明が有る者は商業の必要を感じ、西洋にて其学校が生れたといふ事を聞いて実に喜んで、此の如き先見の明が今日の産業の發達の上に商業が工業の上にも農業の上にも或は運輸交通の上にも与へた所の刺戟といふものは実に大なるもので、内地の商売も段々始まり、外国の商売などいふものも、外国商売と云へば横浜神戸の居留地に居つた外国人に対するものと心得たのが、漸次に支那朝鮮位の商売を始めた。然るに今日は殆ど商業に故郷なし、全世界に向つて日本の商業が發展したのである。此度の事変が起ると、如何なる状態を現はして居るかといふと、此通り英國に日本の生産品を輸出を始め正さに其輸出も段々増しつゝある。然らば東京の商業は世界的になつた。諸君の力も大なる事であるが、時勢そのものが此に至らしめ

た、勢ひ此に至らしめた、人間の智慧は勢ひに乗ずる、如何なる方法も勢ひに乗じなくちやいかぬ。況や勢ひに乗ずべき此世界の大戰、歐羅巴の文明が大戦の為に殆ど根本から破壊されるかも知れぬ、製造界も疑なく大部分は破壊されて居る。七百五十万の世界の商売が少くとも二百五十万は破壊されて居る。是に於て幼稚な工業も幼稚なる商売も之に乗ずる、即ち勢ひに乗ずるのである。そこで渋沢君の慨嘆する商業の道德、是実に大切な事である、勢に乗じて敵と奮闘して勝を制するの、根本は何であるか。道德といふ言葉は誠に凱切な結構な言葉であるが、私は極く卑近なる言葉を以て言ふ、此節外国の領事館からの報告を実は五、六日前に見たのである、全体領事の意気地ない事に頗に攻撃するのである、外交の不振を攻撃するのである。私は賛成する、外交の局に當つて見た処がどうも果して過ちが有るならば改むる。詰り過ちが全く少しも無いとは言はぬが、攻撃するのが悪いといふ事を発見した。それは印度から南洋から方々の領事館の報告を見ると、どうも大阪辺の物が殊に劣つて居るといふ事を書いてある。粗製濫造が多い、荷造が悪い、其他の品物に付ても僅かに市場の信用を受けて取引をされんとするのを続々と破壊し、折角得んとする信用を自ら自殺的に破壊する。何故に破壊するか、粗製濫造日本と取引しても、其品物の荷造が悪い、途中で毀はれる、而して中身を調べて見ると見本と違ふ。そこで私は思ふに、先づ将来世界的に競争をなさんとする。競争とは何である、競争といふ事は力といふ事でありませう。相撲でいふと回向院の相撲でも、又棋客が碁を打つのも、近来流行のベースボールでも、野球でも、其他でも力といふものゝ競争で、商業も矢張り競争である。全体今日の戦争は商業から起つて居る。今日の外交は経

濟から起つて居る。処が外務省の方への報告がズツと蔵つてある、それで居て攻撃する。今度は其方の巧撃どころで無い、実業家は外務省が何故に攻撃せぬか、領事が何故に攻撃をせぬか、何故に実業家は指導せぬかといふ議論をソロ／＼是から始める積りだ(拍手)。新大臣も私と共にやられるに相違ないと認める、そこで私は道徳を考へて見た処が、何でも一番日本が競争の上の弱点は先づ安く作つて高く売るといふ有触れた話だが、甚だどうも正直で無い、嘘を突く、欺くのである。それから少しばかり儲けると、浪費する。少し位身代が出来る、直ぐに安逸主義、享楽主義に陥る。又少しばかり儲かると傲慢になる、又少しばかり金が出来るとそれに満足して安逸する。而して一方に於てはどうであるか、人を欺き嘘を吐く、是が今日の商業の失敗して居る原因であります。内地に於て商業家の社会に於ける地位の低い所以である。何故に産業革命、産業の自由を言ふか。今日の文明国が非常な富を現出し其富をなすものは利己的で無い。国家社会の共同生存、生活、は共同のものである。それで国家の隆運を致し、現はれて国家勢力の中堅とならなくちやならぬ。実業家が富を得るに左様な態度を持つて居るか、是が果して道徳律に照して見て道徳であるか不道徳であるか、私は極く平易な事をいふが、どうも正直で無い。それならば実に陳腐な言葉ではあるが、彼正直は最大の政策なり、自己が金儲けする為にも、自己の商業を發展するが為にも自己が社会に或地位を得るが為にも正直の方が徳である。何故に話らぬ事で人を欺くか、人を欺いて成功する者は先づ少い、現在詐欺取財で富をなしたといふ者も無ければ泥坊で富をなしたといふ者も無い、人に損をさして置いてそれで大金持の出来たといふ事も無い、此の如き社会が集

大なる国家をなしては居ない、それで以て競争は出来ぬ、何しろ今日の商業の發展は全く競争が即ち商業の母である、競争が其国の道徳を發達せしむる事は勿論である。そこで時勢の必要から、先見の明ある人が本校を開いて四十年の内に大なる効果を現はしたのである。而して今日先見の明ある諸君は世界的に商業を發展しなくちやならぬ。世界的に發展するには世界的に競争しなくちやならぬ。今は世界の大なる強敵は何処に在るかといふと我々政治上の敵として居る独逸である。独逸の武力は破壊されるかも知れぬが独逸の文明は破壊することは出来ないのである。文明を破壊する事が出来なければ独逸の商業を破壊することは出来ない。平和克復後將さに来らんとする所の独逸の競争に諸君は向はなくちやならぬ。此競争、而して之を道徳的に最後の勝利を得るといふ事に付て渋沢先生が慨嘆された訳であると思ふ。私は四十年の祝典に依て将来日本の商業が世界的競争に依り充分なる優者の地位を占むる事を予め祝し、是までに組織經營されて是に至つたものが将来益々大なる成功を是から持出すといふ事は信じて疑はない。之を以て祝詞と致します(拍手)。

大隈伯爵の祝辞終るや学生課長小管元四郎、外国教師アレキサンダー、ジョセフ、ヘイアの二氏及び助教教授稻川春氏病氣の故を以て代て出席せる令息端氏、校長佐野博士と相並て壇上に立つ。職員出身者有志総代間島与喜氏亦登壇するや校長より三氏に対し左の挨拶あり。

校長法学博士佐野善作君

本日本校開校四十年記念式を挙ぐるに方りまして此機会に於て、三君

の三十年以上勤続せられたる功勞を表彰し、聊か其勞を慰せんが爲に、本校職員並に出身者有志者が金員を醸集して別封目録の贈呈方を本校に御依頼になりました。乃ち小官は其御取次を致します。

斯くて校長より右三氏に対し目録を頒ち次に職員出身者有志総代間島与喜氏左記功勞頌表文を朗誦す

本日ハ実ニ我が母校ノ創立滿四十周年ノ佳辰ニ屬ス。此ノ祝スベキ喜ブベキ記念ノ盛典ヲ挙ゲラル、ニ際シ、我々ノ最モ敬愛スル御備教師勲四等アレキサンダー、ジョセフ、ヘーヤ、書記正七位小管元四郎、助教教授徒七位稲川春ノ三君ニ対シ光輝アル勤勞ヲ表彰スルハ衷心最モ喜ブ所ナリ。

抑モヘーヤ君ハ夙クヨリ我國ニ渡來シ、明治十二年三月始メテ職ヲ本校ノ前身タル商法講習所ニ奉ジ、英語ノ教授ヲ担任セルコト三十有七年ニ亘リ終始一貫一日ノ如シ。今ヤ齡既ニ古稀ニ近キノ老軀ヲ以テ猶ホ諄々トシテ教ヘテ倦マズ。本校語学ノ教授上ニ貢献セラレタルコト寔ニ甚大ナリトス。

小管君ハ明治九年十一月職ヲ元東京外国語学校ニ奉ジテ数学ノ教授ヲ担任シ、後同校ノ本校ニ合併スルニ際シ本校書記トナリ、学生監督ノ任ニ當リ以テ今日ニ迄ベリ。其ノ間殆ソンド四十年勤続ノ久シキ比類少キノミナラズ、頗ル恪勤ニシテ其ノ職ニ忠ナルハ当世稀ニ見ル所タリ。

稲川君ハ明治十七年一月職ヲ元商法講習所ニ奉ジ、爾來今日ニ至ル迄三十二年、其ノ間専ラ書道教授ノ任ニ當リ、孜々トシテ誘掖最モ勉メタリ。本校卒業生中書道ノ見ルベキモノアルハ、実ニ君ガ陶冶ノ効ニ

歸セザルベカラズ。

我々ハ実ニ三君ノ勤勞ヲ以テ本邦学界ノ一大慶事トシテ、長ヘニ記念センコトヲ欲スルノ情切ナルモノアリ。仍テ茲ニ別封目録ヲ本校ニ提供シ、校長ヨリ贈呈ヲ煩ハシ、以テ誠意ノアル所ヲ致ス。希クハ之ヲ諒セラレンコトヲ。

次に三十年以上勤続者総代ヘーヤ氏の答辞(英語)あり。

校長法学博士佐野善作君登壇せられ

閣下並に諸君、是より

今上天皇陛下の万歳を唱へて此の式を終りたいと思ひます。どうぞ御起立を願ひます。

(一同起立万歳を三唱す)

右にて式全く終了を告げしが、時に午前十一時三十分なりき。其れより同校講堂の南側如水会館敷地に於て、來賓一同に昼餐の饗応あり。食事將に終らんとする時、佐野校長起て一場の挨拶を為し來賓の健康を祝し、次で渋沢男爵來賓を代表して答辞を述べられ、一同和して東京高等商業学校の万歳を三唱し、斯くて全く散会を告げしは午後二時に近かりき。

同夜午後六時よりは校長以下教職員学生等約一千三百有余名の提灯行列あり、其の正六時を報ずるや、楽隊奏楽の裡に校門を出で、先づ校の境外を一周し文部省に至りて万歳を唱へ、其れより直に二重橋に向ひ、其の愈々該橋畔に達するや一同啾啾たる軍楽に和して君が代を合唱し、続いて両陛下の万歳を三唱し奉りて同所を拝辞し、夫れより馬場先門に出で左折して電車路に添ひ神田橋を経、錦町天理教会の角

を折れ、校門指して無事帰着せしは八時過ぎなりき。

尚ほ当日各地より、祝電賀状等の到達せるもの如左

祝電

四十年記念式ヲ祝ス

根室 田崎 要

謹テ御盛典ヲ祝ス

大阪 神山 和雄

本日ノ盛典ヲ祝ス

鹿兒島出張中 福井 菊三郎

遙ニ御盛會ヲ祝ス

門司出張中 大熊 篤太郎

四十年盛典ヲ祝ス

長岡 江口 定條

盛典ヲ賀ス

新潟 松田 安之

本日ノ盛典ヲ祝ス

秋田 佐々木 佐七

謹ミテ御盛典ヲ祝ス

岐阜 拓植 武千代

謹ミテ貴校創立四十年記念式ノ盛典ヲ祝ス

山口高等商業学校長 横地 石太郎

御盛典ヲ祝シ奉ル

同窓会京都支部

本日ノ盛典ヲ祝ス

兵庫 白杉 次郎太郎

貴校創立四十年記念祝典ヲ賀ス

長崎高等商業学校長 山内 正瞭

商典ヲ祝シ貴校ノ隆運ヲ祈ル

香川県立商業学校 三戸 得一

井上 広太郎

森本 重樹

片野 実之助

渡辺 竜聖

盛典ヲ祝シ功勞者ニ謝ス

小樽高等商業学校 坂本 陶一

四十周年ヲ祝ス

鳥取 村松 弥一郎

御盛典ヲ祝シ三先生ノ健康ヲ祈ル

鳥取 高島 佐一郎

盛會ヲ祝ス

富山市同窓会員

御盛典ヲ祝シ併セテ母校ノ隆盛ヲ祈ル

同窓会関門支部

今日ノ御盛典ヲ祝ス

徳島県立商業学校長 菅野 修蔵

謹テ御創立四十年記念ヲ祝シ今後一段ノ御盛運ヲ祈ル

胆振苦小牧 高島菊次郎外出身者一同

御盛典ヲ祝ス

甲府 小阪 耕三

本日ノ式典ヲ祝ス

福岡同窓会生一同

母校ノ盛典ヲ祝ス

横浜電線株式会社 和氣 一郎

盛會ヲ祝ス

逸見 信躬

御盛典ヲ祝シ故矢野次郎先生始メ創立以來ノ高商職員諸氏ノ御尽力ヲ

感謝ス

東京高等商業学校万歳佐野校長万歳三十年以上勤続諸氏万歳

名古屋 市邨 芳樹

創立四十年記念式ヲ祝ス校務多忙ノ為參列不能ヲ遺憾トス

嘉義 島 覚 治

盛典ヲ祝ス

熊本原 稜威雄

村瀬 玄

賀 状

拝啓愈御清穆ノ段奉大賀候扱テ今回貴校創立四十年記念式御挙行ノ由誠ニ御目出度茲ニ謹テ奉恭祝候先ハ御悅申上度如此ニ御座候草々敬具

加地 吉彦

拝啓愈々御多祥奉賀候扱テ本月二十二日ニハ創立四十年記念式御挙行被遊候由大慶至極ニ奉存候茲ニ謹テ当日ノ盛式ヲ祝シ併テ母校将来ノ

隆運ヲ奉祈候

原 稜威雄

拝啓御校創立四十年記念式挙行ノ旨拝承感慨不禁愈々校運ノ旺盛所禱ニ御座候左ニ聊右祝福ノ微衷表白致度奉得貴意候敬具

邦のためのそみあふるゝ富の道

まことをつくしむ乃津くるまで

伏乞斧正

倉西 松次郎

謹啓本月二十二日御校創立四十年記念式御挙行之由奉欣賀候敬具

仁川公立商業専修学校にて 吉田 義夫

遙ニ御校第四十年記念式ノ盛典ヲ祝シ益々雄飛の新日本ニ御貢献アラ

ソコトヲ奉祈候

香川県坂出町 鎌田 憲夫

祝母校創立四十年記念日 福島県石城郡内郷村 村谷 九一

謹啓本日母校創立四十年記念式壮挙せらるゝに当り恭しく慶賀の辞申

上候小生都合あしく本日遺憾ながら応招いたし兼ね候間祝詞を申上猶

吾校将来の盛運を祈上候拜具 千駄ヶ谷町四九一 渋谷 金三郎

母校之光輝ある過去四十年間之歴史を顧み茲に謹而賀意を表し申候草

々頓首

甲府市畳町十七 西垣 直記

謹東京高等商業学校創立四十年記念式

萩原 英助

謹て一橋母校の創立四十周年記念祝典を慶祝し勤統諸君子の健康を祈り更に母校将来益々大発展して全世界に於ける最高盛善最盛大の商業経済の学府たらん事を祝福致候と同時に

佐野校長を始め教授職員諸氏並に満校学生諸君の健康を祈上候尚ほ又

故森文部大臣

故矢野校長

故駒井校長並に

歴代の校長

渋沢男爵始め過去及現在の商議員諸君の功勞を感謝し其健康を祈奉候

敬白

長崎高等商業学校教授 田尻 常雄

同 川口 西三

同 田崎 仁義

同 講師 丸谷 喜市

次に祝典第二日なる九月二十三日(木曜)も、幸にして前日同様の快晴なりしが、午前八時より、母校講堂に於て、予定の記念講演あり。閉会を告げしは点灯時に近かりき。

第三日(二十四日)及び(二十五日)共に頗ぶる好天気にして予定のプログラムを何等の支障なく執行して、毫も遺憾なきを得たるは、自ら本校将来の大発展をも卜知し得らるゝの感じせられて、本校の為め誠に慶賀に勝へざる次第なりき。

大正五年二月七日印刷
大正五年二月拾日發行

(非賣品)

東京市神田區一ツ橋通町

發行所 東京高等商業學校

東京市小石川區久堅町百〇八番地

印刷人 高橋季吉

(印刷所別印録支博)